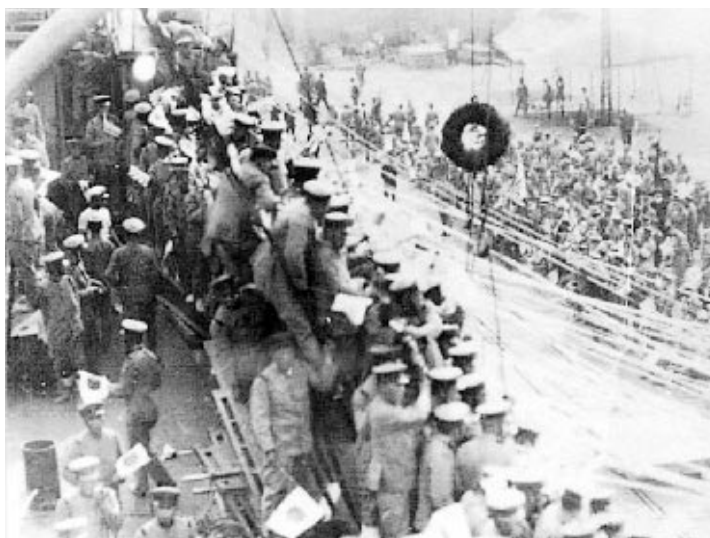


14. 昭和時代①（戦前・戦中）

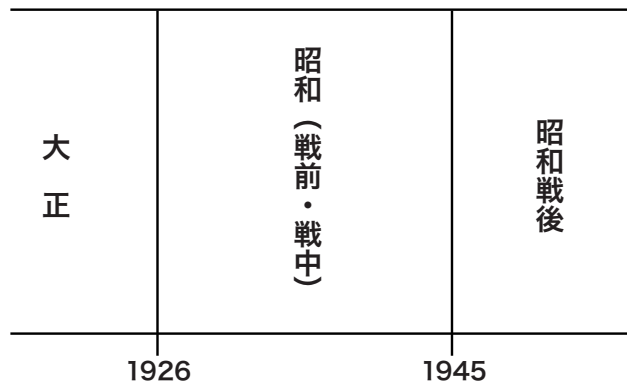
大正 15 (1926) 年 12 月 25 日に大正天皇のあとを継いで裕仁皇太子が皇位につき、昭和と改元しました。昭和時代の始まりです。

(1) 門司港の様子

門司港は、地理的に大陸に近いことから、国際貿易港として発展してきましたが、日清戦争から前線基地としての役割も果たし、多くの将兵や弾薬、食糧、軍馬などを運んでいきました。



門司港から出征する兵士と見送りの市民たち



昭和5(1930)年の有業・失業者数

市	有業	失業
門司	24,411人	2,128人
小倉	15,081	1,064
戸畑	9,611	687
八幡	38,341	1,481
若松	12,248	1,194
計	99,692	6,554

(「わが町の歴史小倉」)

(2) 戦争への道

昭和 4 (1929) 年に、アメリカのニューヨーク市のウォール街で起こった株価の急激な下落が、世界の経済に大不況（世界恐慌）を引き起こしました。そして、その大不況は、日本を直撃しました。

日米の経済関係を表す言葉に、「アメリカが“くしゃみ”をすれば、日本は“風邪”をひく」がありました。これは、日本の経済は、アメリカの経済の好況・不況に強く左右されていて、貿易の最大の相手国がアメリカであったことを意味しています。

アメリカ依存の日本経済は、この“くしゃみ”によって、企業が倒産し、多くの失業者を生み、輸出が激減していきました。特に輸出の激減は、農民の生活を支えていた養蚕業を直撃して、まゆの

値段が急落しました。門司市の失業率も9%にせまろうとしていました。

この不況を乗り切るために、日本軍は中国の満州（東北部。現在の遼寧・吉林・黒龍江の三省と内モンゴル自治区の一部を合わせた地域）を占領し、日本の支配下に置きたいと考えました。

昭和6（1931）年9月18日、日本軍は、奉天（今の瀋陽）郊外で南満州鉄道の一部を爆破して、これを奉天駐留の中国軍の仕業であると決めつけました。世にいう「満州事変」の勃発です。

以後、日本は15年にわたって、戦争への道を歩くことになりました（15年戦争）。



○ 殉難軍馬之碑と出征軍馬の水飲み場

戦争では多くの馬が使われました。農村で使われていた農耕馬は軍に集められ、軍馬として戦場を兵士とともに駆けめぐりました。

軍馬は指揮官を、あるいは連絡する兵を背に乗せたり、大砲や弾薬、食料を前線の将兵に届けたりしました。

アメリカ軍がこのような連絡・運搬の手段として自動車を用いていたのに対して、日本は明治時代の日清戦争以来、相も変わらず、軍馬が用いられていたのです。

この差は、当時の日本の工業力、すなわち、技術・設備・規模・種類・生産量・多くの種類の原料入手などのどの分野においても、アメリカのそれに大きく水をあけられていたことから生じたものです。

門司港の岸壁から輸送船で中国の戦線に送られ、さらに東南アジアの戦線へ将兵とともに移動して行った軍馬がどれほどの数だったかは、今となっては知るよしもありません。

門司区清見の正蓮寺には、「日支事変殉難軍馬之碑」が建っています（日支の「支」は当時の日本が中国をさした言葉です。支那の「支」です）。

昭和9（1934）年9月の建立です。軍馬塚がある寺として有名なこの寺に、軍馬の遺骨や遺髪などがたびたび送り届けられたため、正蓮寺婦人会が、浄財を募り建立したのです。



正蓮寺境内に建つ
「日支事変殉難軍馬之碑」

それ以後、戦災での一時期を除いて、毎年、法要が営まれています。また、戦場へと出征して行く軍馬のために、門司市畜産組合の人たちが門司港岸壁一帯（今の国道199号線）に「出征軍馬の水飲み場」を造りました。

半円形のコンクリート製に蛇口を取りつけたものです。今は、ただ1か所、下関（唐戸）に渡る渡船乗り場近くの北九州水上警察署レト口交番横に保存されています。それが、写真のものですが、これは、199号線沿いにあったものを今のこの地に移したものです。



出征軍馬の水飲み場

○ 郵便仕分け作業を手伝った子どもたちの奉仕記念碑

旧丸山松本尋常高等小学校（今は丸山・錦町両小学校が合併して門司海青小学校）の校庭に写真の記念碑がありました。

昭和12（1937）年11月2日から24日までの間、高等科2年生（今の中学2年生）300名が郵便局の仕事の加勢に行った時のものです。

石碑の裏面には、「中国との戦争で、門司港より出兵の送り迎えが連日続いた。中でも、高等科2年生は門司郵便局に12日間奉仕し、山積みした郵便物を整理し、500円の謝礼を受け取り、陸海軍に寄付した。」という意味のことが書かれていました。この石碑は、門司海青小学校の資料室に保管されています。



丸山小学校にあった当時の記念碑



門司海青小学校に残る記念碑の一部



記念碑の拓本

○ 門司大空襲

昭和16(1941)年12月8日、日本陸軍は、マレー半島のコタバルを攻撃し、海軍は、アメリカ領ハワイの真珠湾(パールハーバー)を攻撃し、ここに太平洋戦争が始まりました。

太平洋戦争の始まりとともに、日本軍は中国軍との戦いを強めながら、東南アジアへと攻めていきました。

昭和17(1942)年2月にはマレー半島のシンガポールを、3月にはジャワ島を、さらに5月にはフィリピンを占領し、初めのころの日本軍は連戦連勝の勢いでした。

「勝った、勝った、また勝った。」と、戦勝が伝えられるたびに、全国で門司市で、人々は昼間は「旗行列」、夜間は「提灯行列」で、「バンザイ!」と叫びながら熱狂しました。

しかし、6月にミッドウエー島沖海戦やガダルカナル島での激戦に敗れてからは、アメリカ軍の反撃がすさまじく、やがて門司もアメリカ空軍による空からの攻撃(空襲)を受けることになりました。

門司は大陸に近く、しかも、将兵や軍需物資・食糧を輸送する港がありましたから、門司とその周辺の都市が攻撃を受けるようになったのでした。

昭和19(1944)年6月16日の夜中の1時すぎでした。アメリカ空軍爆撃機のB29とB24の約24機が、彦島(下関市)の方向から門司港地区に飛来してきました。

このときは、東郷地区を除く門司全域が約2時間にわたって空襲されました。東京にあった戦争の全指揮をとる大本営は、右のように発表しました。



空襲後の門司の市街地(白い部分は焼けた地域)

(アメリカ空軍基地歴史資料室所蔵)

(写真提供:“北九州の戦争を記録する会”)

大本営発表。

本日16日2時頃、支那方面ヨリB29及ビB24、20機内外北九州地方ニ来襲セリ。我制空部隊八直チニ迎撃シ、ソノ数機ヲ撃墜シ、コレヲ撃退セリ。我方損害八極メテ軽微ナリ。

- 支那 → 当時、中国をこう呼んでいた
- ・ 来襲セリ → 来襲しました
- ・ 制空部隊 → 飛行部隊
- ・ 撃退セリ → 撃退しました
- ・ 軽微ナリ → 軽微です

ところが、実際はかなり違っていました。

「ソノ数機ヲ撃墜セリ」は「セリ」ではなく「セズ」だったのです。また、「損害八極メテ軽微ナリ」ではありませんでした。この夜の門司の損害は、死者33名を含む262名が死傷し、全壊19戸を含む233戸が破損しました。

この日から昭和20(1945)年8月15日までの約1年間、門司市民は、他の北九州4市の人々とともに、16日間も断続して空襲警報（空襲を知らせ、避難を早くするよう連絡する知らせ）のサイレンに恐怖を感じていました。

昭和20(1945)年6月4日、沖縄が米軍の手に落ちました。すると、門司に対する空襲は、爆弾攻撃から、市街地では焼夷弾攻撃に、関門海峡では機雷投下攻撃になりました。

市街地の住宅のほとんどは木造家屋でしたから、米軍は焼夷弾という火災を広げる爆弾で街を焼き払う攻撃に変えたのです。さらに、船が近づいたり直接触れたりすると強力に爆発する機雷を海底に落としておくことによって、軍艦や食料・軍需物資を積んだ船が海峡を通過できないようにする戦略に変えたのでした。

門司大空襲の日……。それは昭和20(1945)年6月29日と7月2日の両日、門司市は下関市とともに焼夷弾の投下によって市街は焼け野原となりました。

空襲で受けた門司の市民の被害は少なくありませんでした。約1万8,000人が死傷し、約3,770戸の家が破壊されたり、焼失したりしました。



B 29 ボックスカー号の飛行コース

○ もし小倉に原爆が投下されていたら

当時の小倉市の人口は、約13万1,400人で、陸軍の兵器工場がある都市でした。

昭和20(1945)年8月9日午前3時ごろ、テニアン島を3機のB29が飛び立ち、小倉市を目指しました。

3機が小倉市の上空に達した時、その空は前日の八幡大空襲の煙と濃いもやに覆われていました。そのため3機は、第2目標の長崎に向かい、原爆を投下しました。たった1個の原爆で、7万3,000人ほどの死者が出ました。

研究者たちの研究によりますと、もしも小倉に原爆が落とされたときには、ほぼ大里地区全体に降り落ちる「死の灰」によって多くの死者が出たであろう、ということですが・・・。